

第2回

日常生活の再発見

ー エスノメソドロロジー ー



2014年11月13日*
千葉大学 研究室にて



<http://www.ucilab.yrk.co.jp/>

『現場を訪問してみた』『たくさん気づきがあった』けれど、どのように活かしたら良いか悩んでいるという声もよく聴きます。では「私たちの目に見えていることとは違う何か」を理解するためには、どのような知見や態度が求められるのでしょうか。

「エスノメソドロロジー」という言葉をご存知ですか。デザイン思考で良く持ち出される「エスノグラフィー」とは異なる社会学のアプローチです。私たちが何気なくできてしまっている「当たり前」の中にある方法論に、どうすれば気づくことができるのか。日本におけるエスノメソドロロジーの第一人者である西阪先生にお話をお伺いしました。

*このインタビューは2014年11月に行われたものを再編集したものです。

1. そもそも「エスノメソドロジー」とは？

“ 社会の中にはゴミはない。 ”

ある見方からすればみみっちいことを
やっているように映るのですけどね。



— 先生が研究していらっしゃる「エスノメソドロジー」とはそもそもどのようなものなのでしょうか。

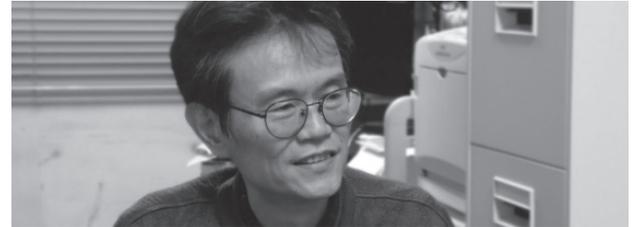
西阪仰氏（以下略）：「普通に社会を生活している人たちが社会生活を営むのに用いている方法論があり、その方法論を明らかにしていきましょう」というのがエスノメソドロジーという言葉の意味なんです。一般的に社会学というと、いわゆる社会問題やなにか大きな社会システムみたいなことを考えていくイメージがあるじゃないですか。そんななかでエスノメソドロジーは日常生活がどういものなのかを考えた時に、日常生活というものが非常にきめ細かく巧みに、かつ精巧に組み立てられている。しかもその組み立て方というのもみんなが好き勝手にやっているのではなくて、ある方法論に基づいて行われているのではないか、ということなんですよ。つまり日常生活で私たちが用いているけれど、普

段は気づかれないような形で存在している方法論を明らかにしていこうというものなんです。

— なぜあえて日常の「方法論」に注目するのでしょうか。

ガーフィンケルの有名な例えで『従来の社会学というのは、何が屋根を支えているかを見るために壁一つ一つを取り外していくようなものだ』というものがあります。日本と違ってアメリカの家屋は柱がないので屋根を支えているのは壁なんです。だから、その壁を取り外せば屋根（社会）を支えている何か（システム）が見えてくるんじゃないかと思って壁を外していくんだけど、結局屋根を支えているものは何もなくなってしまう。つまり、普段はどうでも良いように見られているような一つ一つが、実は社会生活を営む上では重要な意味を持っている。だから、

奥を探っていくのではなく、手前にある表層的なものをきちっと見るのが大事ということなんです。だから方法論といっても、「社会の深層に隠れている文化のパターン」といったものではなく、私たちが普段使っている非常に表層的な部分にそういう方法というがあるので、細かいことをどうでも良いことだといって見逃したり捨ててしまうのではなく、その細かいことも様々な違いなどに十分気をつけて見ていき、人々の方法論を明らかにしようといったことをしています。



— 細かいところまでというと、どこまで見ていくのか際限がない気がします。

だから実際にやっていることは、ある見方からすると非常にみみっちいことをやっているように映るのですけどね（笑）。ただハーヴィ・サククスという会話分析の創始者が、『社会の中にはゴミはない』という言い方をしています。普通だったら『こんなものはゴミだ』といって社会学者が捨ててしまう些細なものでも、実はそれこそが屋根（社会構造）を支えているものであり得るので、きちっと見ていきましょうというのが、エスノメソドロロジーのスタンスなんです。

— エスノメソドロロジーと「エスノグラフィー」は混同されることが多いと思うのですが、どのようなところに違いがあるのでしょうか。

基本的に、自分たちの知らないところに行って新しい情報を得てくるというのがエスノグラフィーだと思います。一方でエスノメソドロロジーは、エスノグラフィーが前提としているようなことを考えようとしています。例えば、エスノグラファーたちが『この人たちは、自分たちとこういうふうには違うんだ』ということを見出すときに、その違いというのがそもそもどうして違いとして認識可能になっているのかとか。そもそもそういう生活を成り立たしている、私たちもしくは彼らが持ってい

るメソドロロジー（方法論）は何なのか、というようなことを対象としています。そういう意味ではエスノグラフィーが、何が事実かということを集めてくる一つの手法であるとした時に、エスノメソドロロジーはその事実がどのようにして事実として成立しているのかということを見ていくものだと思います。

ただ、エスノメソドロロジーとエスノグラフィーとは、その場でしか分からない個別のことを丹念に見ていくという点で親和性もあるんですけど。

— 先生がエスノメソドロロジーに注目された経緯を教えてください。

私が大学院に入った頃に、私よりも1、2歳上の方たち、例えばいま埼玉大学にいらっしゃる山崎敬一さんや、日本大学にいらっしゃる好井裕明さん、松山大学にいらっしゃる山田富秋さんという人たちがエスノメソドロロジーに関心を持ち始めていて、あまたあるアプローチの中の一つとして出会うことができました。その時は、日本ではまだ珍しいものではあったんですけど。一方で、私はもともとどちらかというと社会理論みたいなことにずっと関心があって、その時に注目されていたドイツの、ユルゲン・ハーバーマスやニクラス・ルーマンといった人たちの議論について勉強をしていたんです。

そこでは、コミュニケーションというのが一つのキーワードだったん

です。ハーバーマスはその後「コミュニケーション的行為の理論」という本を書きましたし、ニクラス・ルーマンは自らのシステム論においてコミュニケーションをシステムの要素とみなしていました。コミュニケーションをシステムの要素と考えることによって、社会システムということの考え方がかなりガラッと変わるような議論を展開していたんです。そういうところでコミュニケーションを考えるにあたって、会話分析とかエスノメソドロジーにも関心を持ってはいたんです。で、理論のための材料を得ようと思ってエスノメソドロジーや会話分析を学んでいるうちに、気がついたらそれが専門になっていった、という感じでしょうか（笑）。

— 理論というと具体的なことを抽象化していくというイメージがあるのですが。

コミュニケーションを考えるにあたって、抽象的な理論の肉付けとして具体的なことを考えたいというのもあったのですが、ただ話はもう少し複雑なんです。具体的なものを十分な抽象度をもって使うためには、本当に具体的にならなきゃいけないという面もあるんです。社会を、本当に十分な抽象度や一般性をもって語るためには、「ゴミ」のような些末なことがらを全部拾い集めて、その一つ一つをつぶさに見るぐらいの具体性を持たなければいけないと思うんです。だからそういう意味では一般性とか抽象性とかをすべて捨て去ったというわけでもなかったんです。少なくとも当時の自覚としてはね。



2. エスノメソドロジーで用いられる“手法”

“ 従来の言語学では捨てられてしまう
ことも、相互行為をみることで
機能的に捉えることができます。 ”

— エスノメソドロジーでは「会話分析」という手法が多用されているように思うのですが。

細かいことを見る時に録音や録画は一つの手がかりとして有効なので、会話分析はエスノメソドロジーを遂行していく上での方法的基盤になっています。会話分析としてではなくてエスノメソドロジーそのものをやってる人たちでも、会話分析的手法をいろいろな形で使うのが一般的な傾向であるように思います。一方会話分析をまったく使わない人もいます。例えばエリック・リビングストンは、数学の証明や物理学の実験を自分で実際にやってみるという手法をとっています。エスノメソドロジーは「科学社会学」の中で重要な役割を果たしているのですが、最近翻訳が出たマイケル・リンチも（「エスノメソドロジーと科学実践の社会学」）、会話分析から距離をとっています。ただし、彼も博士論文では

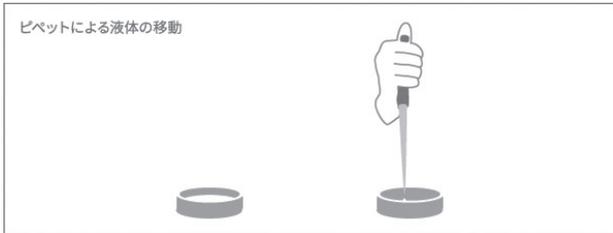
会話分析的手法を部分的に使っています。

— 科学社会学とはどのようなものなのですか？

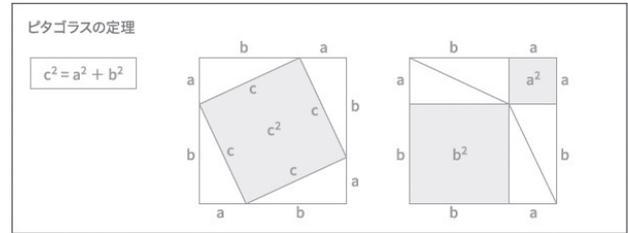
科学と日常活動はかなり違うと思われがちですね。科学が客観的なのに対し、日常的に私たちが考えることは主観的というふうに。科学は全てのことが一義的に決まっていて、実験もきちんと手続きに従ってやっていて、だから出てくる知見は誰にでも共有できると。ある意味その通りなんだけれど、実際の実験や理論化の細部においては、実は様々な「常識的手法」が用いられています。実際に普段の生活の中で、何かインストラクション（指示）が与えられても、実はそこから行為は一義的に出てこないですね。例えば私たちが本欄かなにかを組み立てようとした時、一緒に梱包されている設計図はかなり簡単なものです。その平面図から立体をイメージするためには、様々な常識的な知識を動員しなければいけないでしょう。それと同じで、科学の場合も『こうやって実験をする』と教えられても様々な科学以前の知識を動員しないと成り立たないんです。その時に何が動員されているのかということ、自分で実際に実験に参加して体験する。すると、すごく簡単そうなのが自分でやってみると実は上手くできなかつたりということがあります。

— 具体的にはどのようなことがありますか？

例えばエリック・リビングストンが言うには、ピペットで液体をとって、もう一方の容器に移動して落とすという行為ができない。何が難しいかというと、しずくを垂らす加減が難しいらしいんです。何も知らずにやると、指をパッと離してしまうので、液体がドドドッと全部落ちてしまう。では一気に落とさないためにどうするのかということで周りをよく見ると、みんな指を離していないんです。指を強く押しつけたまま液体を吸い上げて、運んだあとは力をゆるめる、ただそれだけなんです。



すごく簡単なことだけど、そんなことはどこにも書かれていない。彼は原初的という意味で「アルカイック」なテクノロジーという言い方をしているのだけど、そういうものが存在しているんですね。このようなそれ自体は全然科学的ではない様々なテクノロジーを用いないと、一見客観的な科学実験の行為も成立しないんです。



あるいはピタゴラスの定理などの数学の証明でも、直角三角形に四角が描かれていれば、それが何を証明しているのを見れば分かりますよね。しかし、そのように見えるということが、どうして成し遂げられているのか。あるいは、そもそもその図（＝証明）自体が、私たちが計算式や補助線を描いたという作業過程の産物です。そういった作業自体のアルカイックなテクノロジーを見ていくエスノメソドロジストたちもいます。実際にやってみて、自分がどういうふうに行ったかを記録していくといったやり方をとっています。

— そういう意味ではピアノとか楽器の譜面からどう演奏するかというのも、テーマになるかもしれませんね。

そうですね。実際にジャズのインプロビゼーションの研究もあって、ガーフィンケルの弟子でデビッド・サドナウという人がやっています。彼はもともとピアノそのものはある程度弾けていたらしいんですけど、思い立って先生についてジャズピアノの勉強を始めます。その時からとりあえずインプロビゼーションができるようになるまで、手の動かし方とか、自分の音がどういうふうに聴こえるようになってくるかというのを記録していきます。それをまとめた本は結構有名で、日本語訳も出ています（「鍵盤を駆ける手」）。徳丸吉彦さんという音楽学者や、実際にジャ

ズを演奏する方が訳しているのですが、山下洋輔も帯にメッセージを書いていますよ。だから、エスノメソドロジーには、会話分析と離れたところの仕事もたくさんあります。

— 体験を自分で試してみたいということですか。

そうですね。自分で実際にやる、そういう意味ではエスノグラフィーとすごく親和性がありますよね。

— その時の記録とは自分の中での潜在的な意識というアプローチではなく、自分の表層を細かく捉えるということですか。

そうですね。エリック・リビングストンは本当にいろんなことをやっていて、クロスワードパズルを解くときに何をどう行っているのか、を記録していくということもしています。

— 記述しているときに、「心の動き」みたいなものはどう考えるのでしょうか。

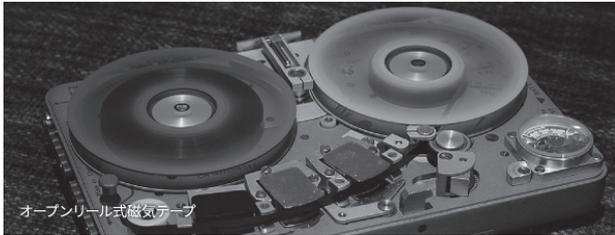
「心の動き」というとちょっと語弊があるかもしれません。「知覚の動き」といった方が正確だと思います。どういうふうに自分の知覚が変わっていった、何がどう見えるようになっていくのか、といった感じですね。例えば、プリズムを使った光学の研究みたいなのを、あのゲーテがやっていたらしいんですよ。リンチたちはそのゲーテの実験を自分たちで再現してみても、実際に何がどういうふうに見えるのかみたいなことを研究しているんです。ゲーテの見方はニュートンの見方とどう違うのか、そこにはどのような知覚の構造の違いがあるのかとか。

— エスノメソドロジーでは言葉が核になるのでしょうか。

言葉だけではないです。ガーフィンケルは自然言語と言っていますが、ジェスチャーなんかもありますし、ジャズの例なんかは身体的な振る舞いですし。全部合わせてそれをどう使っているのかということだと思うんですよ。

— そういう意味では、言葉で明らかになる範囲というのはどんなものなのでしょうか。

それは難しい問題で、実際、研究者によって見解が異なります。一つだけいえるのは、会話分析が今みたいな形で展開してきたのは、テクノロジー的な制約のもとにあったからだと思います。



まず録音技術は、1960年代には民生用オープンリール式磁気テープが普及し、その後すぐカセットテープが出てくるというふうにごく早い展開をしていきました。また、電話は音声だけの相互行為なので、会話を録音することによって一つの活動を十全に捉えることができる。なので、当初、言葉のやりとりの録音に集中してきたことが、会話分析の現状を大きく決定づけていることは確かだと思います。だからといって、言語がほんとうに相互行為の中心にあるとっていいのかというまた別の話です。UCLAにいるチャック・グッドウィンが、ずっと早い時期からビデオに着目していて分析していました。彼は『会話分析の現状はあまりにも言語偏重で、よろしくない。むしろ身体の方が言語より重要だ』ということを一貫していっています。例えば会話に「間」があいた時に、会話分析的にみるとその前の発言に対する不同意が来るのではないかと分析してしまうのだけど、実際にビデオを見るとその「間」に色んなことが起きている。だから言語だけを見るのではなくて、振る舞いも見なきゃいけないというようなことを、よくいっています。

— そうすると、必ずしもエスノメソドロジー=会話分析ではないんですね。

エスノメソドロジーの中から会話分析が出てきて、学問として分離独立したといってもいいかもしれません。会話分析はある程度一般性のある手続きを明らかにするので、旧来の学問的なやり方と馴染みやすく、言語学者の間でも広がっていきました。従来の言語では、例えば「言い淀み」みたいなものは全部ゴミとして捨てられてしまうんです。でも、実際に言葉を使うとき、言い淀みなんかがどういふふうに通っているのかとか、「あっ」とか「おお」といった普通の文法言語学ではうまく乗ってこないような「些細」な表現形式が会話分析を用いると、相互行為における機能という観点から捉えることができる。ということで、いわゆる機能言語学とくられる言語学の分野の中の一角を現在会話分析が占めるに至っています。

会話分析が一般手続きに志向する傾向があるのに対して、エスノメソドロジーに強いこだわりのある人、例えばマイケル・リンチやエリック・リビングストンみたいな人たちは、逆にもっともっと個性の高い分析を追求しています。

3. エスノメソドロロジーが明らかにしようとしていること

“ 「行われている」 ことであれば
何でも議論の上に乗ってきます。 ”

— 最終的にエスノメソドロロジーが明らかにしようとしていることは何なのでしょうか。

最初のガーフィンケルの比喻に関わってくると思うのですが、細かいことが社会を支えているのであって、そこから何か一般性を見つけようとすると、逆に社会を支えているものを見失ってしまうんじゃないかということなんです。

— エスノグラフィ的な目線では、細かいことの集積から共通項を見出し、『これが実は社会を支えている見えない構造なんだ』と言いたくなるのですが、エスノメソドロロジーでは、細かいことは細かいこととして置いておいてどんどん集積していくということでしょうか。

そうですね。でも、ただ集めればいいというものではないんです。少なくとも集めることができるということは、何かが認識できて何かを基準に集めているわけです。ということは、その事実を集めるための独特のメソドロロジーがあるはずだし、自分たちが集積したものの中にも何らかの秩序があって、その秩序を支えているメソドロロジーがあるはずだから、それをきちっと解明しておくということになると思うんです。エスノグラファーたちは基本的に取材の段階では細かいことを集めてきて、次の段階では割と大きな枠組みで分析します。エスノメソドロロジーから見たら、そこにある様々なメソドロロジーあるいは手続き、ルールみたいなものをもっときちっと見ていくことが必要なんじゃないかということになると思うんです。

— エスノメソドロロジーが取り扱うものの傾向、分野みたいなものはありますか？

一つは、とにかく行われていることであれば何でもです。例えば『何か行われている』と認識できるということは、そこには既に秩序があるはずなんです。だからそれがピアノを弾くことであれ、ジャズであれ、あるいは買い物をするものであれ当てはまります。『買い物が買い物であるということが、どう成立しているのか』という問いが立つんです。そういう意味で、何でも議論の上に乗ってきます。もう一つの答え方としては、アルカイックなテクノロジーが語りやすい場所というのがあって、その一つが科学なんです。科学研究というのは合理的で客観的というイメージがあるし、実際のプロダクトはそういうものとしてできています。が、そのプロダクトができるまでの過程においては、先ほどお話ししたような様々なプラクティス抜きにはあり得ないんです。よって、科学的実践というのがエスノメソドロロジーの得意な分野(行為)になっています。



それともう一つは、本当にどうでも良い日常的なもの、その代表として「おしゃべり」があります。まったくどうでもよいおしゃべりも、実は精巧に組み立てられているということ、これを示すことの意義は、やはり大きいと思います。先に述べた録音技術のことだけではなく、電話での会話というのがフィールドとして選ばれたというのは偶然ではないし、そこで洗練された、エスノメソドロジーのためのメソドロジーが出てきたというのもやっぱり偶然ではないと思うんですね。エスノメソドロジーが取り扱うものの傾向というと、会話と科学研究をまず挙げることができると思います。

— エスノメソドロジーでの成果は、最終的にどのような形で表わされるのでしょうか。

難しい質問ですね。会話分析の場合は、「順番交代のやりかた」*とか、名前で表現できるものが多いんです。特に会話分析の場合には、マシナリー（装置）とかメカニズムとかという言い方をしますが、何かその会

※順番交代

会話を行うにあたって欠かすことのできない、基本的な手続き。会話では話し手となることができるのはその都度一人だけであり、誰かが話し手になっているときには他の人は聞き手になり、次に別の誰かが話し手になれば、今まで話し手だった人は聞き手になるというように、発言の順番交代があるというもの。

話自体が持っている、人間が動かしているのではなくてむしろ逆に人間を動かしているようなマシナリーがあると。例えば順番交代もマシナリーによって、例えば「順番交代」のためのルールによって動かされていますよね。そういうマシナリーが明らかになるという言い方が、会話分析の場合は可能なんだけれど、エスノメソドロジストは必ずしもそうではないんです。ただ、ガーフィンケルがハーヴィー・サックスと共に書いた論文があるんですが、そこで「自然言語の習熟」について話しています。

『自然言語に習熟していることそのことが社会の成員である』と、『社会の成員が自然言語に習熟する』という言い方ではなくて、『自然言語への習熟が社会の成員である』という言い方は、やっぱりどちらかというと、自然言語のマシナリーみたいなのがあって、それによって人の活動が動かされて、人が配置されていくといったイメージに近いような気がします。

エスノメソドロジーの中でそういうふうにな前で表現できるような知見として、例えば…なんだろう、今ふと思いついたけど名前がない（笑）。例えば、これは名前といって良いのかわからないけれど、「レーベンスヴェルト（生活世界）・ペア」というのがあります。ピタゴラスの定理の証明の図の場合、その図自体は何かを説明しているという点では意味をもった成果物ですが、一方でそれを証明として理解するためにはそれぞれの線や角度の意味を読み解く作業が必要ですね。つまりこの図が何かの証明として成立していることは、もう一方のごちゃごちゃした作業の過程と切り離せないじゃないですか。それをレーベンスヴェルト・ペアと呼ぶんです。ごちゃごちゃやった作業の過程に価値があるということなんです。成果物の方をフォーマルアカウント（fomal account）、過程の方をリブドワーク（lived work）と呼んだりするのですが、生きられた（lived）作業とでもいうのでしょうかね。

— そういう知見みたいなことを成果として『こういうことが分かった』という話になってくるのですか。

そうですね。でもすごく一般的すぎるのでこれを成果というのかどうか(笑)。エスノメソドロロジーでは、会話分析が名前をつけて呼んだような形での成果というのは難しいでしょうね。だからレーベンスヴェルト・ペアみたいなものをその個別の領域に置いてどういうふうに記述していくかといった感じでしょうか。

エスノメソドロロジーは個別性に向かっているので、一般理論のようなものがないんです。一般的なフレームワークを持たないんです。ただ、だからといって理論が全然ないというちょっと語弊があるんですよ。エスノメソドロロジーの基本的な態度というのは、ある種の哲学の上に乗っているのです。

— 分析で出てきたフレームワークで他にもいろいろ説明できる「抽象化された理論」というよりは、それによって他にもいろいろ分析ができる「方法」のようなものが出てくるみたいな感じですかね。

そうですね。だから、「理論」と呼ぶよりは「態度」と呼ぶのが適切だと思うんです。

— フレームワーク的な、「モデル化する」とかいうのとは少し違うものね。

— では、エスノメソドロロジーはどのように実践に結び付けられるのでしょうか。

言ってみれば、私たちが既に知っていることを明らかにしているだけなので、どういうふうに応用実践に結び付けるかというのは、どうしても難しい課題ですよ。とはいえ、言語学もある意味同じです。私たちは言語をしゃべれますから。だからあえて実践に結び付けるとしたら、例えば言語学が日本語の言語構造や文法を明らかにすることによって、それを日本語教育に役立てることができるのと同じように、何かの活動のエスノメソドロロジーなり会話分析がその活動の構造を明らかにすることで、その活動へ入っていくこうとする人たちが教育をしようとする人たちの役に立つということがあり得るのかなとは思っています。

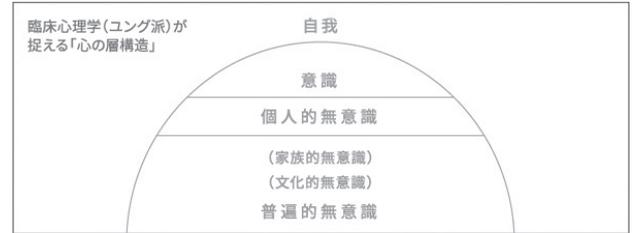


4. エスノメソドロジーの視点で捉えた「心」とは

“ 「潜在的な意識」というと
かなり人工物的なおおいがする
ように思えます。 ”

— エスノメソドロジーの『相互行為における私たちが自覚していない方法論があって、しかも人間自身の意志ではなくマシナリーのようなのが会話を構成している』という考え方は、私たちが日ごろ思っている常識のようなものとは違って、とても刺激的です。

— 一方で、私たちはマーケティングや商品開発でユーザーの心理を理解しようとしたとき「深層心理」や「潜在ニーズ」という概念を用いて『人の言動は本人も意識していない無意識に動機づけられている』というモデルを利用することがよくあります。



出所：河合隼雄（著）『無意識の構造』中公新書 p33、「図4 心の構造」に基づき作成

— エスノメソドロジーの視点では、人の「心」というのはどこに、どのように存在していると捉えているのでしょうか。

私も「心と行為」という本を書いています。心ということ自体を否定する必要は全然ないと思うんです。ただ「潜在意識」みたいな話になると、ちょっと違う話になるかなという気がします。心って実体化されやすいと思うんです。脳科学が発展する前提として、そもそも心は人間の中のどこかの部位に特定化されるような形のあるものであって、それがどこかとした時にとりあえず脳にあって、だから脳をみれば人間の心理は解明される、というのが心理学から認知科学への一つの流れだったと思います。でも、そもそもそういうものとして心があると考え、心自体がおかしいのではないかと、というようなことを考えていたんです。

— 普段私たちは、「認識」というのは純粋に自分の内側で起きているプロセスと考えていますが…。

『何かを覚えている』とか、『何かを見た』とか、心的表現っていくつもありますよね。これはヴァイドゲンシュタイン（ルートヴィヒ・ヴァイドゲンシュタイン）が言っていることですが、心を現わす様々な名詞、例えば「理解」や「解釈」という名詞が、例えば「ペン」という名詞がこ

ういうもの（ペン）を指し示すのと同じように、モノではないにしても何かを指しているように捉えがちになる。けれど、そもそも言葉がどういうふうに働いているのかということを見ると、ちょっと違うように見えてくるのではないかと。実際に相互行為（会話など）の中で、『何かを見た』と言葉として伝えることはなくても、お互いに『相手が何かを見た』ということ的前提に振舞う様子を捉えることはできるでしょう。例えば、『あっ、〇〇が動いた』と何かの場面を見ながら言うとかですね。その時に『相手が〇〇を見ている』という判断が、どのようになされるのかを考えると、「見る」ということの捉え方が『脳味噌を分解すれば分かる』ということとはちょっと違うこととして理解できるのではないのでしょうか。

— 実際に自分では見ていない、また「見た」と聞いていない人が「見る」ということを会話の前提として無自覚に共有できているということですね。そうすると「見る」という言葉が何を指しているのか、何をしていることなのか分からなくなってきました。

脳がなければ知覚もないので別に脳を否定するわけではないのですが、『人間が何かを見る』という現象自体は脳の働きではありません。脳はそういう現象を支える物質的基盤と考えられます。「見る」ということが実際にどういうものとして人々に扱われているのかを考えると、「見る」ことの社会性みたいなことも見えてくるんじゃないかと思うんです。例えば、人の顔を見る時にはその人の唇とか鼻とか眉毛とかいろいろなものも、網膜には映っている。でも、私たちは、『さっき〇〇さんにお会いしました』とは言うけど、『さっき〇〇さんの眉毛を見ました』とは言わないですよね。そうした時に見ているのは、網膜に映った何かではありません。「見る」ということは、その時の社会的な状況や活動との関連のなかでのみ意味を持ちます。

記憶も同じだと思います。ある意味では、頭の中には山のようにいろいろなことがストックされているわけですが、その中で覚えておくことができることは、ものすごく限定されています。例えば、『私は今でもまだ日本語を覚えています』とは言いませんよね。一方、『ドイツ語をまだ覚えている』とは言えます。つまり、脳内のどこかになにかがストックされているとしても、日本語を第一言語としているかぎり、日本語を覚えていますなんて言わないわけです。そうすると、「記憶」という言葉の働き方も、社会的なコンテキストに依存していることが分かります。

— 「見る」ということや「覚えている」ということが、単に自分自身の内側で完結するものではなく、人と人との相互行為まで含めて捉えないといけない、ということですね。そうすると、臨床心理学で定義される「深層心理」や「潜在意識」というものはどうなるのでしょうか。

会話分析でも、例えば普段「気づかずに」順番交代のルールに従っているという言い方をすることがあります。言語に関する様々な約束事もほとんど気づいていないですよ。けれど、この場合の「気づかずに」というのは、フロイトにしてもユングにしてもその精神分析派が「無意識」と呼ぶものとはかなり違います。例えば、助詞の「に」の用法を言うてくださと言われても、すべては言えない。しかし、私たちは助詞の「に」を難なく使っている。でも、それを無意識に使っていると呼ぶのはすごく抵抗があるんです。だって、言われれば『ああ、そういう用法が確かにありますね』って分かるじゃないですか。でも、精神分析派のいう無意識は、指摘されても本人には分からなかったりしますよね。例えば、『あなたは無意識のうちに自分の母親を愛してるんですよ』とか、『母親に性的欲望を持つてるんですよ』とか言われても、たいいてい人は否定する。そういう意味での「無意識」は、私たちのいう「気づかずに」あるいは「無自覚に」ということとは、まったく違います。そういう意

味で、精神分析の「無意識」というのは、何かすごく人工的な感じがしてしまうんです。モデルとしては分からなくもないし、それで実際にノイローゼの方が治ったとかいうのであれば、その概念のツールとして有効性を否定するつもりは全然ないのですが。

5. 今後の展望

“ エスノメソドロジーや会話分析に関心をもってくれる裾野をどれだけ広げることができるかが大切なと思うんです。 ”

— 最後に、先生の研究の今後の展望を教えてください。

若い時は自分の関心事に突っ走っていったんだけど、最近、この後自分が何を残せるのかということを考えた時に、やっぱり残せるのは人かなって思うんです。じゃあ人を残すためにはどうすれば良いかと考えると、やっぱりどういう風にそれが使えるかということと切り離しては考えにくい。そんなわけでオウム真理教の会話分析をやってみたり、山形の119番通報の分析に首を突っ込んでみたりということもやっています。昔はそれこそ役に立つかどうか分かりませんと言いながら調査協力をお願いをしていたのですが、今はむしろ積極的に（現場で活用されることを意識して）やっています。今、福島県の病院で医療従事者と来院者のみなさんのやりとりを研究させていただいています。先日も、医療

従事者のみなさんに、暫定的な知見をお示しました。医療従事者のみなさんのほうからも、『こんなことをしてもらえれば使えるかもしれない』という助言をいただいたりしています。そのようなやりとりをしながら、分析をすすめてみたりしています。

— 実務で使おうとすると「ゴミはない」といいながらも、やっぱりどこかで省く作業が結局必要ですよね。

西阪：そうですね。結局教育や、あるいは逆にそれをインストラクションとして使う時にはここまで分析しなくても良いということがでてくると思いますね。

あとは、自分の見出したものを使って自分でそれを実践していくというやり方も考えられますよね。さっきのサドナウもジャズの教師をやってるんですよ。サドナウメソッドと自分で言ってアメリカ各地でジャズピアノを教えていたようです。

— 分析をした人間が一番わかるようになるというのはあるかもしれないですね。

他には、近年特に、お医者さんは医療コミュニケーションに関心を持っていらっしゃると思いますね。お医者さんや医療関係のみなさんは、どのように話せば患者さんは納得してくれるのかということに関心があるようです。

— そういう意味では、教育の現場とかお医者さんとかと、繊細なコミュニケーションが求められるところがエスノメソドロジー活用の実践の場としてあるのかもしれないですね。

こちらの知見を選元できる一つのフィールドかなと思っています。

例えば、今、福島県で内部被ばく検査に関するやりとりの研究をして

います。震災当時放射線を浴びてしまったり、食物として取り込んでしまったことでの内部被ばくを心配されている方のために検査を提供している病院で、お医者さんが検査の結果を説明する場面をビデオに録らせてもらっているんです。受検者の方や家族の方々も、あるいは医療従事者の方も、いままで経験のないことに直面しています。そういうなかで、どういうふうコミュニケーションをとっていけば良いかということについてすごく関心を持っていただいています。例えば、どういう形で質問をすればどういう形で答えが返って来やすいか、というようなことがまとまった形で言えれば良いなと思ってやっています。

— 新たに発生した相互行為について、方法論を探って役立てていくということですね。

結局は、(エスノメソドロジーや) 会話分析をしない人たちがどれだけ関心を持ってもらえるかということが、人を残すということに繋がるんだと思うんです。つまり、適切な言い方かどうか分かりませんが、会話分析を「生産(作りだす)」する人が沢山出てきても供給過多になるだけなので、それを活用してくれる人たちの裾野をどれだけ広げられるかということが、会話分析の今後、あるいは会話分析の生産者を育成していくのには、やっぱり大切なと思うんです。結局、会話分析者以外で会話分析に関心を持っていただける人がいないと、仲間内だけで論文を書いて、それだけで終わってしまうので、それではやっぱり人は育たないかなという感じですよ。

— 本日は貴重なお時間をいただき、ありがとうございました。